

阿闍佛と般若波羅蜜經

加藤 智 學

一 現在十方の諸佛

釋尊入滅の後、諸遺弟の間には、未來成道の彌勒佛(Maitreya-Buddha)の所に往至して慈化を蒙り智徳を増進せんと欣求する志念ありき。有學の聲聞(Śākyaka)には、たゞ此の當來世の值佛聞法を期して阿羅漢(Arhan)果を得證せんと希求したりし徒輩あり。さるほごに、大乘(Mahāyāna)に發起したる菩薩(Bodhisattva)摩訶薩(Mahāsattva)は、亦この未來佛の勝縁を思念せざるには非ざれども、其の信解廣大にして、現在十方に無量の佛世尊ましくて利生說法し給ふを感見したりき。三世十方の諸佛の證悟したまふ所の大般涅槃(Mahāparinirvāna)は、絶對平等一如の法身(Dharmakāya)ならざるべからず。法身の宣顯は、『増一阿含』四十四に、「肉身は滅度を取ると雖も、法身は存在せり」と説かれたり。又その第一卷の序品によれば、法身不壞は佛の所説の法の永存を意味す。佛の所説所説の法の不滅の思念せらるゝと共に、佛には生滅する肉身に非らざる不滅の法身あることを觀想せざるを得ざりき。されば、佛在世に「佛を念せよ法を念せよ僧を念せよ」と教授せられたる佛

子等、佛の入滅し給ひし後にありても、此の世は無佛の時季と爲れるとも、大福田にして大導師なる佛を禮念せざるべからざりき。かくて、佛の肉身の滅したまへる後にありては、其の念佛には、必ずや佛の法身を念想したるもの無からざらんや。法身は絶對不二にして諸佛一如なり。佛境界は一即一切にして、一佛を念ずるは即ち諸佛を念ずるなり。佛滅後、菩薩摩訶薩、念佛して感見する所あり。般舟三昧 (Pratyuppana-samādhi) の如きを發得するあり、一佛を見れば諸佛を見、はた一刹土の過現未の諸佛を念想するのみならず、現在十方に無數の佛土ありて無量の諸佛の演法度生したへるものあるを認知したりき。大乘に發趣して智徳を増進せんとする菩薩は、諸佛に敬事し衆生を利濟し諸波羅蜜 (Pāramitā) を修行すべく、一佛國より一佛國に生じ、十方佛土を遍遊し、大莊嚴を以て衆行を具足せんと欲す。かゝる廣大の願行を以て理想とせる菩薩摩訶薩にありては、法身不壞の一如法界は觀想せられ、釋尊滅後の念佛三昧海中に、現在說法利生の十方の諸佛を念見し、此等の他方有佛の刹土に往生して智行を増進せんとする志願は發起せられたり。かくて先づ其の名號の示現せられ其の願行果徳の宣顯せられたりしは、東方妙喜世界の阿閼佛 (Aksobhya-budha) 西方極樂世界の阿彌陀佛 (Amit'ha-budha) にてありき。

二 東方の阿閼佛

阿閼 (Aksobhya 不動) 佛の尊號は、初期の大乗敎徒の爲に最も早く示現せられたる他方世界の佛

名なりき。其の因行果徳を宣顯したるは『阿闍佛國經』なり。此の經は後に『大寶積經』の第六會に編入せられて『不動如來會』と稱せらる。此の經に記説する所によれば、佛、耆闍崛(Gṛdhrakūṭa)山に在まして大比丘衆千二百五十人と俱なりし時、舍利弗(Śāripuṭṭha)往昔の菩薩摩訶薩の行願を開示し給はんことを請ひしかば、佛は爲に阿闍菩薩(Ak. oḥya-bodhisattva)の願行と其の果上の功徳莊嚴とを演説し給へり。是より東方千世界を過ぎて佛刹あり阿比羅提(Abhirati 妙喜・妙樂)と名づけらる。昔、大目(廣目)如來、彼の刹土に出現して諸々の菩薩の爲に微妙の法を説き、六波羅蜜を首として教授したまへり。時に一比丘あり、佛の示教を受けて、誓願を發起すらく。「世尊。我、今日より阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無諂・無誑・實語・不異語を以て一切智智を求めん。乃至未だ無上菩提を得ざるに、若し衆生に於て瞋害の心を起さば、則ち無量無數無邊世界中の現在説法の諸佛如來に違背すと爲す。世尊。我今此の一切智心を發して是くの如く廻向す。其の中間に於て、若し聲聞・獨覺の心を發さば、則ち一切諸佛を欺誑すと爲す。世尊。我今此の一切智心を發して是くの如く廻向す。乃至未だ無上菩提を得ざるに、若し衆生に於て愛欲瞋癡の心を起し、或は憍沈・貢高・惡作と相應すれば、則ち一切諸佛を欺誑すと爲す。世尊。我今此の一切智心を發して安住し廻向す。乃至未だ無上菩提を得ざるに、若し擬惑の心を生じ、是くの如く、或は殺害・不與取の心を起し、或は邪見及び非梵行を起し、妄語・兩舌・粗語・相應し、或は損害と相應せば、則ち一切諸佛を欺誑すと爲す。」

是くの如く大精進の鎧を被て、一切の衆生に於て恚恨なく、瞋怒等の爲に搖動せられざるが故に、彼の國中にて阿閼(不動)と名づけられたり。阿閼菩薩は猶ほ多くの誓願を發起したまへり。かくて其の本願には、因位の修行の清淨眞實ならんことを誓へるあり、又果上の佛國の功德莊嚴を誓へるあり。其の果上の功德莊嚴を誓願し給へるには、「願はくば、我、佛と成らん、彼の刹の中に於ける一切の菩薩、佛の威力を以て、我が説法を聞き、受持し讀誦し、及び能く諸佛如來に歷事し、一佛刹より一佛刹に至り、乃至未だ無上菩提を證せざるには、常に諸佛世尊を遠離せざること、譬へば我が如くならん、唯だ兜率天宮の補處の位を除く、」若し我當に無上菩提を證すべくんば、彼の佛刹に於て菩薩乘及び聲聞乘を行する者、皆諸の魔業を斷じ、諸の衆生の類、一切の種に於て、一切の時に於て、諸の魔衆をして其の便を得ざらしめん、」我が佛刹の中の所有の菩薩摩訶薩、皆、法身圓滿を得ること、我が如くにして異なり無からん、」若し我、無上菩提を證することを得んに、諸の聲聞衆、(行・住・坐の)三威儀を以て滅度を取らん、」願はくば、我、佛と成らん、彼の刹土の中の所有の菩薩、我が威力を以て聽聞する所に隨ひ、皆能く領悟して、受持し讀誦せん」等とあり。此等の願文は彼の經中に散説せらる。阿閼菩薩は此等の誓願を建て、生々の處に於いて諸佛如來に供養し奉事し、彼の佛所に於て常に梵行を修し、一佛刹より一佛刹に至り、有佛の世に生じて常に如來に見えたとまつり、菩薩・聲聞を化導し、示教利喜する所、みな波羅蜜(Paramitas)と相應し、

少しく聲聞地とも相應し、此等法施の善根を以て無上菩提に廻向し給ひき。かくて遂に彼の阿比羅提 (Abhirati 妙喜) 世界に於て阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttara-samyak-sambodhi) を證得し、本誓願を成辨して、阿閼如來と號し、今現に在まして說法利生し給へり。阿閼佛の大光明は普く三千大千世界を照し、日月諸天の光、悉く現せず。彼の佛國の功德莊嚴は殊勝淨妙なり。彼の世界の衆生には唯だ歡喜愛樂の善心あり。彼の佛刹の中には三惡趣なし。一切の衆生、十善を成就す。女人は玉女寶に超勝し天の功德を獲て過失なし。阿閼佛には無量無數の聲聞の弟子あり、又無量百千億の出家在家の菩薩あり、佛の說法を聞きて聖道を増進す。菩薩、彼の國に往生すれば、其の修行に魔障あることなく、みな阿惟越致 (Avalokita 不退轉) 地を得ん。されば、阿閼佛の威神力を蒙りて修行を増進せんと欲する者は、彼の阿比羅提世界に往生せんことを志願す。かくて、彼の佛刹に往生せんと欲するには、應に阿閼佛の昔修行し給ひし菩薩の行を學し弘誓の心を發して彼の國に生せんと欲願すべきなり。菩薩、布施波羅蜜を行じ、此の相應の善根を以て無上菩提に廻向し、阿閼佛に會遇したてまつらんと願すれば、彼の佛土に往生することを得べし。持戒波羅蜜、乃至、般若波羅蜜を修して斯くの如く志願するも亦同じく往生することを得。又諸の佛名・法名・僧名を聞きて念持し廻願すれば、彼の佛國に往生すべきなり。彼の佛土の功德莊嚴の善快殊妙なるを見たてまつらんと念願し、見たてまつりて我また勝妙の土を攝取せんと志し、幾百幾千の菩薩を勸助すれば、此の因縁を以て

亦彼の佛國に往生することを得べし。阿闍佛は久しき後に般涅槃し給ふ。その後、香象 (Gandharhasin) 菩薩の補處成佛し給ふありて金蓮如來と號す。此の如來の佛刹の功德莊嚴は、阿闍佛國に等しくして異なりあること無し。如上、阿闍佛の因源果海は、『阿闍佛國經』(發意愛慧品・阿闍佛刹善快品・弟子學成品・諸菩薩學成品・佛般泥洹品)ととの異譯本なる『大寶積經』十九・二十の『不動如來會』(授記莊嚴品・佛刹功德莊嚴品・聲聞衆品・菩薩衆品・涅槃功德品・往生因緣品)とに説ける所なり。

三 般若波羅蜜經

阿闍佛國に往生せんとする信念は、大乘初期の經典中に顯現したりき。されば般若波羅蜜 (Prajñāpāramitā) を廣説せる最初の經典と思考すべき『小品般若經』(『道行般若經』『大明度經』『大般若經』第四會) 等) には、過去の然燈佛 (Dipaṅkara-buddha) を説き、當來の佛たる彌勒菩薩 (Maitreya-bodhisattva) を説き、而して又處々に他方現在佛なる阿闍佛 (Akṣobhya-buddha) を説けり。阿闍佛の尊號は『小品般若經』中に數回演述せらるゝ所なるが、特に其の『恒伽提婆品』に女人往生成佛を説けるは頗る注目すべき事たるなり。「恒伽提婆品」には、「爾の時、會中に一女人あり、恒伽提婆 (Gangādeva) と字づく。」「佛、阿難 (Ananda) に告げたまはく。是の恒伽提婆女人は、當に來世の星宿劫の中に於て成佛することを得べし、號して金華と曰ふ。今、女身を轉じて男子と爲ることを得、阿闍佛土に生じ、彼の佛の所に於て常に梵行を修し、命終の後、一佛土より一佛土に至りて常に梵行を修し、

乃し阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで諸佛を離れず。」「阿難。是の女人は、然燈佛の所に於て初めて善根を種ゑ、是の善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、亦金華を持ちて然燈佛に散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求めたりき。阿難。爾の時、我は五莖の華を以て然燈佛に散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求む。然燈佛、我が善根の淳淑なるを知り、即ち我に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまひき。時に、此の女人、私の記を受けたるを聞き、即ち發願して言はく、我も亦是くの如く、未來世に於て當に記を受くることを得べしと。如今、是の人、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり」と説かれたり。又「見阿闍佛品」には、「佛、般若波羅蜜を説きたまふ。是の時、會中の四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、皆佛の神力を以ての故に、阿闍佛、大會の中に在りて、恭敬し圍繞せられて、爲に法を説きたまふを、見たてまつりき」等と、見佛の事を説けり。『小品般若』の經説は更に敷衍せられて『小品般若』の經説と爲れり。されば、如上の所説は、亦悉く『小品般若經』の中に存せり。『小品般若經』にも、同じく「恒伽提婆品」あり。而して見阿闍佛の事は「囑累品」の中に説かれたり。又『小品般若經』には「往生品」あり、(是れ『小品』には存せず)「是の般若波羅蜜品を説く時、三百の比丘、座より起ち、著くる所の衣を以て佛に上り、阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。」「佛、阿難に告げたまはく。是の三百の比丘、是より以後六十一劫にして當に佛と作るべし、皆號して大相と名づく。是の

三百の比丘、此の身を捨て、當に阿閼佛國に生ずべし。及び六萬の欲天子、みな阿耨多羅三藐三菩提心を發し、彌勒佛の法の中に於て出家して佛道を行す」等と説けり。かくて、『大品般若經』は、「夢行品」「淨佛國土品」等に於て 菩薩道の願行を叙説し、淨佛國土成就衆生の道法を演說せり。〔淨佛國土品〕の教説は『小品』に存せず。其の「夢行品」には、「佛、須菩提(Subhūti)に告げたまはく。菩薩摩訶薩ありて、檀那(Dāna)布施)波羅蜜を行する時、若し衆生の飢寒凍餓して衣服弊壞せるを見れば、菩薩摩訶薩は當に是の願を作すべし、我、爾所に隨ひ、檀那波羅蜜を行じ、我、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして是くの如き事なく、衣服・飲食・資生の具、當に四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天の如くならしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く檀那波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に、須菩提。菩薩摩訶薩の尸羅(Sīla)戒)波羅蜜を行する時、衆生、殺生し、乃至、邪見にして、短壽、多病、顔色好からず、威徳あること無く、貧にして財物に乏しく、下賤の家に生じて形殘醜陋なるを見れば、當に是の願を作すべし、我、爾所の時に隨ひ、尸羅波羅蜜を行じ、我、佛を得る時、我が國土の衆生をして是くの如き事無からしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く尸羅波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。」「復次に、須菩提。菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行する時、衆生の三聚、一には必正聚、二には必邪聚、三には不定聚に住するを見て、當に是の願

を作すべし、我、爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め、衆生を成就し、我、佛を得る時、我が國土の衆生をして邪聚なく乃至その名をも無からしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近く。復次に、須菩提。菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、地獄の中の衆生、畜生・餓鬼の中の衆生を見て、當に是の願を作すべし、我、爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め、衆生を成就し、我、佛を得る時、我が國土の中に、乃至、三惡道の名も無からしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近く等とあり。又「淨佛國土品」には、「佛言はく。菩薩ありて、初發意より已來、自ら身の麁業を除き、口の麁業を除き、意の麁業を除き、亦他人の身口意の麁業を淨む。」「菩薩摩訶薩は、皆是くの如き麁業の相を遠離し、自ら布施し、亦他人を教へて布施せしめ、食を須つには食を與へ、衣を須つには衣を與へ、乃至、種々の資生に須つ所、悉く之を給與し、亦他人を教へて種々に布施せしむ。是の福德を持て、一切の衆生と之を共にし、淨佛國土に廻向するが故に。持戒・忍辱・精神・禪定・智慧も、亦是くの如し。」「復次に、須菩提。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、是の願を作して言はく、我、當に自ら初禪に入り、亦一切の衆生を教へて初禪に入らしめ、第二・第三・第四禪、慈悲・喜・捨の心、乃至、三十七助道法も亦是くの如くし、我、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、一切の衆生をして四禪を遠離せざらしめ、乃至、三十七助道法を遠離

せざらしめんと。」是の菩薩、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、十方國土の中の諸佛は讚歎し給ふ。衆生、是の佛の名を聞きて、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る」等とあり。『般若經』によれば、菩薩は斯くの如く六波羅蜜を修行して佛國土を淨め衆生を成就するなり。過去の阿闍菩薩・法藏菩薩の如き、皆各々願行を發起して佛國土を淨め給へり。今は現在説法利生の佛世尊として他方世界に在り。『般若經』には其の阿闍佛の利生を説けり。(阿彌陀佛の利生を説かず。)蓋し是れ『小品般若』を誦出したる菩薩の志念の表顯せられたるものなり。當時先づ他方佛刹に往生せんとする信念の存したるものは、阿闍佛國に往趣せんとする志願によりて代表せらるべきものにてありしが故ならん。『小品般若』は、次期の經典にして、彼の『小品』の經説を更に敷衍したる廣本なれば、亦『小品』と同じく阿闍佛國への往生を叙説したりき。さるほどに『小品般若經』、『放光般若經』、『大般若經』第二會』等)には、淨佛國土・成就衆生の願行を廣説せり。そは『阿闍佛國經』・大『阿彌陀經』等の所説と對照すべきものなり。大『阿彌陀經』は、是より已前に誦出せられたるものなるべく、頗る早き時代に成立したる經典にして、『阿闍佛國經』の次に成りしものと想察し得べく、此等は大乘初期の經典として尊重せざるべからず。『阿闍佛國經』・大『阿彌陀經』には、『般若』の影響を受けしと見るべきもの少く、寧ろ此等の經典より『般若經』に影響せりと認むべきものゝ多大なるを考察せざるを得ざるなり。